

わたしたちの 庄内  
海岸林  
物語

しょうない  
かいがんりん  
ものがたり



みんなで  
考える!

みんなで  
植える!

みんなで  
守る!



雑祭りの日、傘をさしながらの食事(酒田市浜中地区)。



植林前の砂に埋もれた庄内海岸。



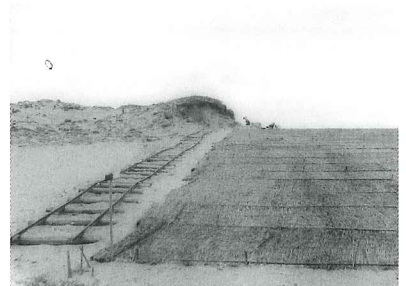
一列に並んで、アキグミを植栽。



植えた苗の周りを踏み固める作業。



防風垣をつくる作業。



整地しカヤで砂をおおった後、ようやく植林作業へ入る。

## 戦後、荒廃した海岸林の 復興に、林野庁が貢献しました。

先人たちが血のにじむような苦勞を重ねて植林した庄内海岸のクロマツ林は、第二次世界大戦、そして戦後の混乱などによって荒廃しました。林野庁は昭和26年、「海岸防災林造成事業」によって庄内海岸に植林を開始します。現在の海岸林は、偉大な先人たちの植林事業、その後の国による造成事業があって、美しい松原が維持されているのです。



クロマツを埋没させた重い砂を運ぶ女性たちの姿。

# 砂と風から、街を守るための植林

長い間、飛砂の害に苦しめられてきた庄内の人々。それを救ったのが、酒田の本間家三代当主、本間光丘をはじめ、佐藤藤蔵や佐藤太郎右衛門による血のにじむような植林事業でした。今日の美しいクロマツ林の原点がここにあります。



# 先人が植えた、クロマツの役割

**江** 戸時代の中頃まで、庄内海岸一帯は草木が生えない荒れた砂丘地でした。北西の風が吹くたびに砂が舞い飛んで、空は真っ黒になり、人の行き来もとだえがちになりました。

町の人々は顔を上げて歩くこともできず、家が砂に埋まってしまう被害が出るほどでした。また、砂は周辺の平野にまで飛び、田畑に被害がおよぶこともたびたびあり、庄内に暮らす人々は長い間、飛砂の害に苦しめられてきました。困り果てた地域の人々を救うために、庄内砂丘にクロマツの植林事業を行おうと立ち上がった先人たちがいました。



たくさんのお金を投じて、植林事業に力をつくした本間家三代当主、本間光丘。彼がのこした業績はその後の庄内の発展に大きな影響を与えた。

と冬が過ぎると、数千本も枯れてしまうこともあったといいます。一本、また一本と、根気のいる途方もない作業の繰り返しの末、宝暦11年(1761)、ようやく一部の植え付けを終えました。植林したクロマツの数は十万本と伝えられています。

本間光丘以前でも、酒田市藤塚の佐藤藤蔵、川南の佐藤太郎右衛門が私財を投じ、血のにじむような努力をかさねながら植林に取り組んできました。これらの人々によって行われた植林事業はいずれも子孫代々へと受け継がれ、永い年月と膨大な労力を費やして、クロマツ林が造られていきました。

このクロマツ林によっていまも、私たちの街が飛砂から守られ、台風などの災害からも守られていることを知ることによって、先人たちが残してくれた庄内海岸の美しい松原を、さらに未来の子どもたちへ残していくことの意義について考えてほしいと思います。



本間光丘の植林事業を伝える松林銘(日和山公園内・写真上)。本間光丘にちなんで名付けられた光ヶ丘地区。道路をはさんで現在も美しい松林がつついている(写真下)。

## 多くの人の努力でつくられたクロマツ林

植林を行った代表的な人物として知られているのが、酒田の本間家三代当主、本間光丘です。光丘は下の山王社境内の高台を起点に、南は最上川北岸から、北は現在の光ヶ丘まで約1800メートル、幅360メートルの植林を行いました。植え付けには多くの困難がともないました。ひとたび強風が吹けば、せっかく植えた苗木の根がむき出しになったり、逆に苗が砂に埋め尽くされてしまうこともありました。ひ



佐藤藤蔵の妹の子にあたる曾根原六蔵(そねはらろくぞう)の植林事業の絵図。当時の植林事業の様子を描いた絵図は珍しく、大変貴重なものである。本絵図は、その一部。

## 荒廃した海岸林を回復するために

戦争によって、ふたたび荒れ果ててしまった庄内の海岸林。林野庁は昭和26年から「海岸防災林造成事業」によって庄内海岸の植林事業を開始。海岸林を守り続ける取り組みがはじまりました。



昭和25年、酒田営林署長となり、日本初の国営庄内海岸防災林造成事業に取り組んだ、富樫兼治郎(とがしかねじろう)。砂防の父ともよばれた。

# 海岸林を守る、林野庁の仕事

## ひろがれ、まわれ、クロマツボランティア

私たちの生活の変化とともに、森林の荒廃が全国各地で問題となっています。庄内では市民によるボランティア活動を通じてクロマツ林への関心が高まっており、その活動は各地から大きな注目を浴びています。



# 森林に関わる、市民の喜び

**第**二次世界大戦、戦後の混乱などにより、かつて先人たちが苦勞を重ねて植林した庄内の海岸林は荒れ果て、飛砂による被害もふたたび激しくなってきます。道路や家も砂に埋没してしまうほどで、海岸に近い場所では家を捨て、土地を離れる人も後をたたない状況でした。

こうしたなかで、林野庁は昭和26年から「海岸防災林造成事業」によって庄内海岸の植林事業を開始します。植栽はまず人工の砂丘を造ることからはじまります。人工砂丘をつくるためには「砂丘垣」と呼ばれる簀垣すのこがきを用います。砂丘地に砂丘垣を立て、風が運ぶ砂を積もらせて、なだらかな山状の砂丘を形成します。海水浴場のような砂地は砂が飛びやすいため、人工的にハマニシクやアキグミなどが植えられました。

### 前線のマツに守られて後方のマツは成長する

クロマツは海岸林に適した樹木ですが、海に近い最前線に植えられたマツは、高さが1~2メートルほどしか成長できません。飛砂を受けとめる前線のクロ



空から見たクロマツ林。遊佐町吹浦から鶴岡市湯野浜に至る延長34kmにわたり植栽された長大なクロマツ林の帯。



大浜海岸でのボランティア活動の合間の一コマ。

葉、マツカサや下草も燃料として、私たちの暮らしに有効に利用されていたのです。

### 豪雪による被害をきっかけに市民の心がひとつに

そのような状況のなか、平成10年11月中旬、庄内地方に突然降った豪雪によって、海岸林のクロマツ林は大きな被害を受けました。この事件をきっかけとして市民の間にクロマツ林への関心が深まり、先人たちの偉業をふたたび認識するとともに、クロマツ林に対して私たちがいまでできることをはじめようという意識が各種のボランテ

ィア団体の活動を通じて急速に芽生えはじめました。

また平成11年に、校舎をクロマツ林に囲まれた酒田市内十坂小学校の五



クロマツ林の大切さを子どもたちにもわかりやすく伝える看板を設置。



ボランティア団体主催で行われた子どもたちのための海岸林学習。



多くの市民が参加して行われた清掃。



酒田市内十坂小学校の児童たちによる「砂防林づくり」。



植林作業を支えた多くの女性労働者。



国有林野事業によって植栽されたクロマツの苗。

マツは風に押されて斜めに伸びながら後方のマツを必死で守っています。前線のマツに守られ、後方のクロマツは、より大きく成長できるのです。

庄内海岸林は遊佐町吹浦から鶴岡市湯野浜まで延長34キロメートルに及びます。昭和26年からはじまった植林事業は、先人たちがかつて、血のにじむような努力をかさねて造り上げてきたクロマツ林を回復させる壮大な仕事でした。この仕事は現在も庄内森林管理署において、継続的な維持管理業務、マツクイムシ被害への対応などを含め、庄内海岸林を守り続けるために、日々懸命に取り組んでいます。



# 庄内海岸国有林位置図

## 海岸国有林面積

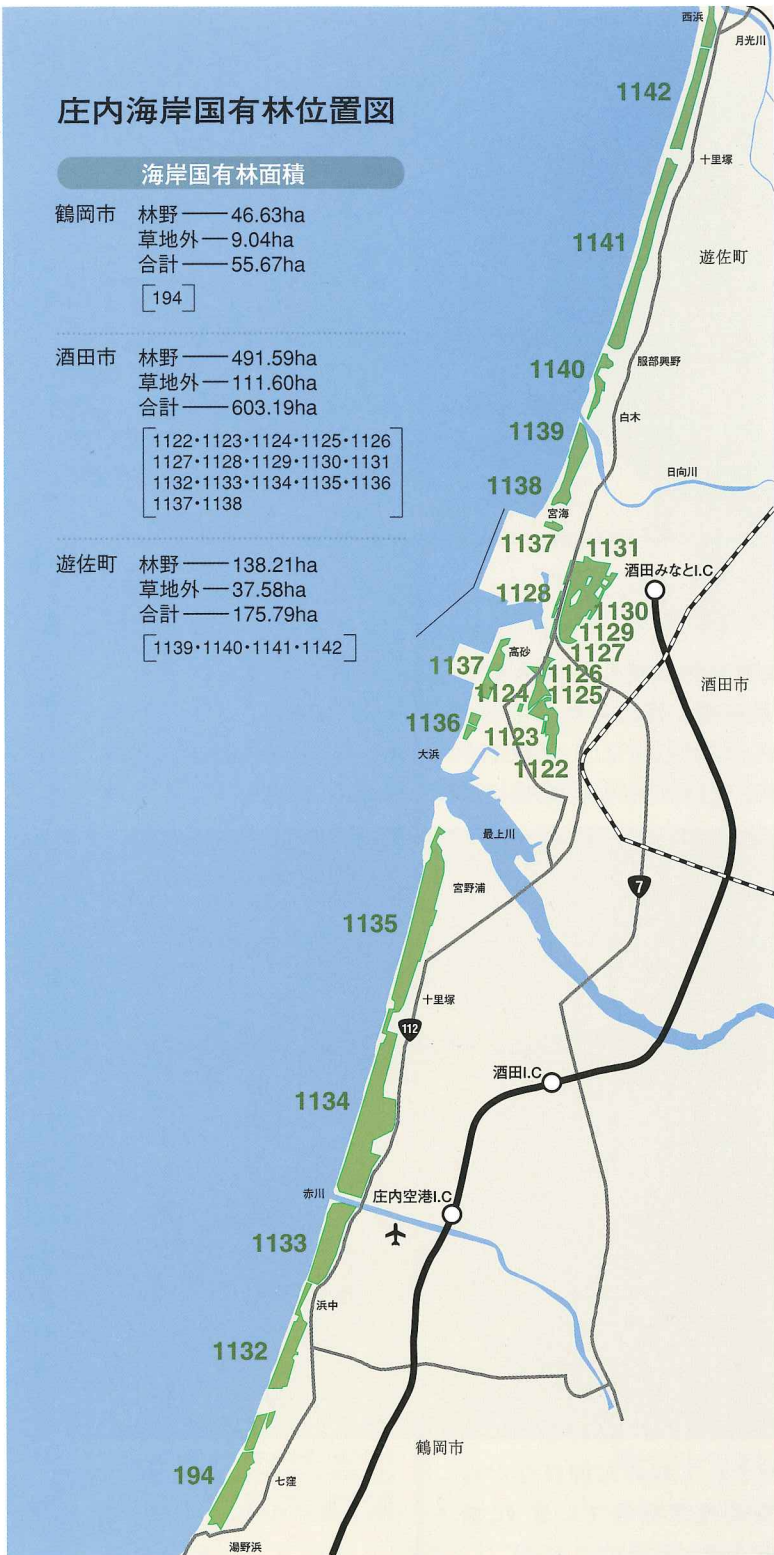
鶴岡市 林野 — 46.63ha  
 草地外 — 9.04ha  
 合計 — 55.67ha  
 [194]

酒田市 林野 — 491.59ha  
 草地外 — 111.60ha  
 合計 — 603.19ha

[1122・1123・1124・1125・1126  
 1127・1128・1129・1130・1131  
 1132・1133・1134・1135・1136  
 1137・1138]

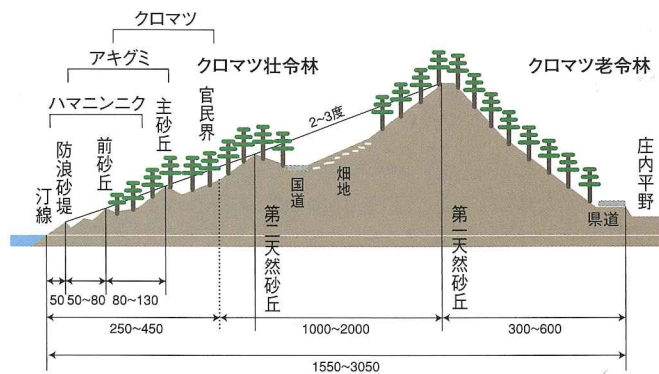
遊佐町 林野 — 138.21ha  
 草地外 — 37.58ha  
 合計 — 175.79ha

[1139・1140・1141・1142]



## 庄内砂丘の一般的な横断面

単位/m



## クロマツと海岸林を守る植物



●ハマニンニク(イネ科)  
 多年草  
 高さ1~1.5m  
 茎の先に  
 長さ15~25cmの  
 穂をたてる。



●アキグミ(グミ科)  
 落葉広葉樹 低木  
 高さ2~3m  
 初夏に黄色の花をつけ、  
 秋には赤い実をつける。  
 葉は白っぽい緑色。



●ハマナス(バラ科)  
 落葉広葉樹 低木  
 高さ1~1.5m  
 秋に親指ほどの大きさの  
 ナンの形に似た  
 赤い実をつける。



クロマツの植栽作業を行うハンコタンナ姿の女性たち。



0.5m間隔で打ち込まれた防浪垣の杭と帯梢の編込み。



砂丘をつくるための竹打。



植栽木周辺の雑草などを刈り払う。

## 林野庁 東北森林管理局 庄内森林管理署

〒997-0015 山形県鶴岡市末広町23-37 tel.0235-22-3331 fax.0235-22-3333

<http://www.syounai-kokuyurin.jp/>

平成20年3月作成